

「まもなく新幹線が通過します」

作／あねざきしょうこ

登場人物

鉄郎 (男) 55歳 和菓子店店主

ユウタ (男) 21歳 鉄郎長男

ミサキ (女) 18歳 鉄郎長女

寺田 (男) 55歳 公務員 鉄郎の同級生

加賀百万石の城下町金沢は北陸新幹線開業まであと一年。何かと話題にのぼり今後の経済効果も期待されている。市内の小さな商店街の一角。カドヤは店主と近所のパート従業員とで細々と商売している小さな和菓子店である。春まだ浅い二月。閉店間近いある日の夕方。鉄郎が店じまいの支度をしている。

店の開き戸を開けて寺田入ってくる。

寺田 よっ、さっむいなあ

鉄郎 おう、今帰りか。冷えとるなあ。うー、やっぱりここにもう一つストーブあったほうがいいかなあ。

寺田 小福、この六つ全部もらおうか。

鉄郎 おう、いつもありがと。福は内っちゅうけど、うちの福は全部外に出てってもらいたいもんよ。

寺田 まだいっぱい残っているんか。

鉄郎 なん、奥にあとちよっこし・・・。

寺田 じゃそれももらってくか。

鉄郎 ほうか、わりいなあ。

鉄郎暖簾の奥に入って行き四個を追加する。

鉄郎 五百円でいいわ。

寺田 ほっか、サンキユウ。

寺田五百円をカウンターに置く。鉄郎十個を経木に包みかける。

寺田 お、今一個くれ。

寺田 小福を二つにちぎってうまそうに一気に食べる。

寺田 うん、これこれこのサイズ、絶妙やな。うちのばあさん言っとったわ。小福の餅は喉にひっつかからんって。

鉄郎 ま、粘り押さえとるし。

寺田 うん、年寄りたちがいいわ。高齢社会来たる。なかなかの時代感覚や。別に。親父の代からのまんまや。

鉄郎

寺田 店の上がりがまちに腰掛け、包みを脇に置く。

鉄郎 トレイなどを片付けている。

寺田 な、鉄郎、来年新幹線来るやろ。

鉄郎 そう言えばお前んとこ地域なんやら振興とか言っとったな。結構忙しいん

やないけ。

寺田 ほおや。ほんでうちの課でも商品開発に必死なんよ。

鉄郎 ふうん。お役所は大変やな。

寺田 まあな。ほんで、これはまだオレだけの考えなんやけど。

鉄郎 うん？

寺田 包みを開いてもう一個食べる。

寺田 やっぱ、小福うまいわ。

鉄郎 ほっか。

寺田 な、鉄郎、これ、新幹線で使うってのはどうや。

鉄郎 は、使うって？

寺田 新幹線はハイクラス仕様もあること知っとるやろ。

鉄郎 ああ、どうせ金持ちばかりが乗るんやろ。

寺田 そこでだ。当然駅弁も金持ち客の需要を見込んでいる。

鉄郎 そうやろな。

寺田 ほんで、高級弁当はすでに料亭仕込みでいくつかの老舗から狙われている。

鉄郎 ふーん、深田屋とか友々楼とか？

寺田 二千円、いや二千五百円でも売れる。ほんでそのデザートとくりゃそれなりのものでなくちゃ。な、そう思うやろ。

鉄郎 まあな。

寺田 さらにもう一個食べる

鉄郎

お茶持ってこようか。

奥へ行きかける鉄郎を制しながら。

寺田

いや、お茶いいわ。それよりな、オレ、お前んとこの小福絶対いいと思う。

鉄郎

何言うとするん。お前、まじでか。

寺田

真面目な話や。我ながらなかなかの思いつきだと思う。

鉄郎

小福がか・・・。

寺田

おう、大きさといい、品の良い甘さといい。小福はいい。

鉄郎

ふーん。ほやけどウチにできるやろか。

寺田

できるできないでなく、チャンスや。

鉄郎

チャンスか。

寺田

そう、チャンス。好機到来。活かさない手はない。

鉄郎

・・・(しばらく間)・・・となると、紅白二個とか・・・

寺田

加賀レンコン味とか開発したらうけるかもしれんぞ。

鉄郎

うーん、チャンスか。いやあ・・・チャンスねえ。

ミサキ帰宅する。

ミサキ

ただいまあ。ああ、寒い。あ、おじさん、いらっしやい。

寺田

お、ミサキちゃんおかえり。寒かったろ。

鉄郎ブツブツひとりごとを言っている。

鉄郎

うーん、レンコン味か。キンジソウの色もいいな。

寺田

おう、いいじゃないか。

ミサキ

何の話？

寺田

ほや、ミサキちゃん、受験今年だったな。うまいこと勉強進んでるか？

ミサキ

うん、今日も美術の先生から特訓受けて来たところ。

寺田

そうか、がんばれよ。ミサキちゃんなら大丈夫だ。

鉄郎

なーん、こいつ受からんわ。美大は競争率高いし。

ミサキ

おとうさん、もう、それって受験生に言うことば？

寺田

はは、そりや当たってる。

ミサキ

もう・・・じゃ、ご飯の支度あるから。お父さん、今日ハンバーグやよ。

鉄郎

お。

寺田 大変だな。お、そうだ。ちよっとミサキちゃん。

ミサキ 何？

寺田 うん、実は、今な、お父さんに新幹線の豪華弁当に小福を付けて売り出さないかって提案してたんだ。

ミサキ エーッ、マジでえ、うちの小福？

寺田 ほーや、カドヤの餅はうまい。他所の和菓子にもひけをとらない。ほんでな。

ミサキ うん？

寺田 いつつぶれるともしれない商店街で年寄り相手に売っているだけではダメだ。

ミサキ うん。もうつぶれかかっとるし。あは。

寺田 な、未来あるミサキちゃん。お父さんの応援しないか。

鉄郎奥へ行ってお茶を淹れて来て寺田に出す。

寺田 あ、ありがとう。(お茶を飲む)

ミサキ自分の茶碗にお茶を注ぐ

ミサキ おじさん、私は賛成しないな。

寺田 え、何で？

ミサキ (お茶を飲みながら) 新幹線需要なんて一過性だと思う。

寺田 うん？

ミサキ それより私、このつぶれかかった街何とかしたい。

寺田 街を？

ミサキ ウチばっか少し儲けたとしたってこの街何も変らない。

寺田 そうだったな。ミサキちゃんは美大行って街のデザインとかやりたいって言うたな。

ミサキ お父さんもお父さんよ。目先のことばっか考えて・・・いつだって全体を見ないんだから。

鉄郎 そうかなあ。

寺田 いや違うと思う。カドヤのことを考えるってことはこの商店街の繁栄につながっていくということだ。ひいては金沢、いや、日本の和菓子文化の発展につながっていくことなんだ。

ユウタ帰宅する

ユウタ ただいま。ああ寒。

三人 お帰り。

ユウタ おじさん、いらっしやい。あ、ミイ、餃子の残りもらってきたよ。

ミサキ ラッキー。じゃハンバーグは作らなくていいね。

ユウタ 晩飯ハンバーグだったんか。ま、いいや。

ミサキ包みのおいをかぐ

ミサキ あ、まだ暖かい。おいしそう。

寺田 三番ラーメンだっけ？昼のバイトなら楽やな。

ユウタ 今日は急に休んだのがいたから。いつもは夜もあるんです。

ミサキ ね、お兄ちゃん、今新幹線のお弁当に小福をつけて売ったらどうかって話してたの。どう思う？

ユウタ へえ。うちの小福を。

鉄郎 寺田がチャンスだつて。

寺田 カドヤの小福を県外のお客にも食べて貰うんや。いいぞお。

ユウタ いいね。じいちゃんならきつと喜ぶと思う。

寺田 じいちゃんか。先代には将棋教えてもらったことあったなあ。ところでユウタはこの店継がないのか？

ユウタ ……

鉄郎 いや、ま、その話は。

寺田 いや、良い機会だと思う。この際店を拡張する。そしてユウタ得意の「T」を生かして金沢の和菓子よさを広めていく…どうや。

ユウタ ふーん、和菓子と「T」ねえ。

寺田 そうだ。これからの販売戦略だ。

鉄郎 ウチにできるだろうか。

ユウタ お父さん、いいかも。「T」も新幹線も。

鉄郎 うーん、考えてもみなかったな。

寺田 だからさ、今から考えるのさ。もう遅いくらいだ。駅前の新しいマンションは完売してるっていうし、観光業界は一分一秒を争っている。

鉄郎 へえ、一分一秒ねえ。

ミサキ店の奥から電気ストープを持ってきて寺田の前に置く。

寺田 や、ありがとう。

ミサキ ね、お兄ちゃんはそれで本当にいいと思ってる？

ユウタ うん？

ミサキ この店継ぐってそんなに簡単なことじゃないと思うよ。

ユウタ そのくらいわかっているよ。でも今は昔と違う。店に買いに来るばあちゃん連中だけ相手にしてはだめだ。ホームページをもっと充実させて販路を拡大していくんだ。おじさんが言うようにこれはチャンスかもしれない。

鉄郎 オレはITはからつきしだめだからな。ユウタにまかせろわ。  
寺田 心強いな。

ミサキ みんなさ。ほんとにそれでいいと思ってる？

寺田 うん？

ユウタ 何？

ミサキ ウチの小福は昔からご法事やお茶のお稽古とかで近所に大事にしてもらってきたじゃない。大量生産したらどうなると思う？

ユウタ なおたくさん使って貰えるじゃないか。

ミサキ もう、だから目先しか考えていないっていうのよ。

ユウタ なんだよ。何言いたんだよ。

ミサキ おじいちゃんの代からカドヤは手作りの良さを売り物にしてきたのよ。大量生産したらその良さがなくなるのよ。賞味期限とか保存のことだってあるし。

ユウタ それは技術力の問題で、工夫すればクリアできるんじゃない。

ミサキ そういうことじゃなくて。

ユウタ 何だよ。

ミサキ 小福を食べたい人は食べたい時にこのカドヤに来て買って食べてほしいの。

ユウタ それだと今と全然違うじゃないか。

ミサキ うーん、どう言えばいいんだろう。カドヤの価値っていうか……。

ユウタ 価値？

ミサキ よく説明できないけど……。それと……その先のことも。

ユウタ 先？

鉄郎 先？

ミサキ そう。お母さんのときもそうだった。

鉄郎 お母さん？

ユウタ 何でお母さんが関係あるの？

ミサキ ……

ユウタ 何だよ。ミイ、言えよ。

鉄郎 うん。何だ？

ミサキ お父さんは自分で考えようとしないうじゃない。だれかがいって言えばいつだってそうかって。お母さんのときだって。

鉄郎 何言いたんだよ？

ミサキ お父さんはおじいちゃんやおばあちゃんの言うままだったよ。お母さんのつら

さわかろうとしなかったじゃない。

鉄郎 ミサキ・・・。

ミサキ 私、小さかったからよくわからなかった。お母さんとおばあちゃんうまくいつてなかったこととか。でも今ならわかるような気がする。

ユウタ 何がだよ。

ミサキ だれかが言ったからとか、近所のみんながどうかいいうんじゃなくて・・・自分はどう考えるかってこと。

鉄郎 お父さんが考えていなかったっていうのか。

鉄郎片付けていたバットの音をたてる。

ユウタ 今それを言ったって。

ミサキ 今だから言うのよ。

鉄郎 ミサキ。

ミサキ お父さんもお兄ちゃんもちっともわかってないよ。私がどんなに我慢してきたか。

寺田 ミサキちゃん。

ミサキ 何が大きかって事、ちっともわかってない・・・お母さんがかわいそう。

鉄郎 新幹線とお母さんとは関係ない。

ミサキ 大有りよ。よく考えてよ。

ユウタ もう、わっからん。

ミサキ 私一人で。いつも私一人が・・・。

ミサキ泣き出す。

鉄郎 ミイ、わかった。もういい。このことはまた。

ミサキ そうよ。お父さんはいつだってそうやって逃げてきたのよ。

鉄郎 逃げる？オレだって考えてるんだ。

ミサキ お兄ちゃんだって行き当たりばったり。ほんとに店を継ぐ気があるの。

ユウタ お前一人が考えているっていうのか。オレだって店のことくらい考えとるわ。

ミサキ 真剣に考えているんならバイトばかりしてふらふらしてるはずないわ。

ユウタ 何。ふらふらだって。

険悪な雰囲気。ミサキ涙を拭く。

鉄郎 確かにオレは考えていないように見えるかもしれん。寺田みたいに新しいこと

に挑戦もしないし。でも店のことはお父さんなりに考えているつもりだ。

ミサキ ティッシュで鼻をかむ

ミサキ ふーん、じゃあ、どんな？

鉄郎 裏の腐った貸家を改装しようと思っている。ワンルームマンションとか。その前にあの人たちに出て行ってもらうわんと・・・。

ミサキ もう何年も前から言ってるけどちっとも進まないじゃん。

鉄郎 ま、その前にやらなきゃならんこともあるし。銀行の手続きとか。あと・・・これはユウタ次第だが厨房をもう少し広げるとか。

ミサキ ふーん。

ユウタ オレだって考えている。

ミサキ ふーん、どんな？

ユウタ バイト、バイトって言うけどオレだって家に少しは入れてるつもりだ。ばあちやんたちが買いにくるのに店先がこんな寒いんじゃないや、な。

鉄郎 エアコンか。

寺田 みんな自分なりに真剣にこの店のこと思っているってことだ。な。

しばらく間。

ユウタ ギョーザの包みを開いて一つつまむ。

ユウタ 食べんか？

ミサキ うん、食べる。

ミサキ ギョーザを食べながら。

ミサキ ね、おじさん、私、思うんだけど。

寺田 うん？

ミサキ 何か、みんなね、目先のことって言うか、自分の得になることばっかし。うん？

ミサキ 新幹線来たら最初のうちは浮かれていいこともあるかもしれない。でもそのあとのことみんな考えたことある？

寺田 あとのこと？

ミサキ そう、ここの商店街どうなる？駅前ばかり、大きい店ばかりいい思いするのわかってるじゃない。

寺田 うん。なるほどね。



ミサキ　　そんでウチの小福の味どうなるの？本当の金沢らしさってどうなっちゃうの。みんな観光客の方ばかり向いててさ。本当は何も考えてないじゃない。

寺田　　うーん、金沢らしさね。わかるよ。ミサキちゃんの言いたいこと。だけどまずお客さんに来てもらわなくちゃ。金沢のために、いや石川県全体のためにも長期の目線と目の前の目標と両方の目をもつことが大事じゃないかな。

ミサキ　　あのね、今までの成長・発展路線はもう古いんだって。説明会で大学の先生言ってた。

鉄郎　　古い、か。

ユウタ　　お前さ、誰かの受け売りばっか言ってるか？

ミサキ　　失礼ね。うーん。今はまだうまく言えないけど・・・だから勉強するのよ。

寺田　　うん、うん。なるほどね。

ミサキ　　それよりみんな、何で今あるものを大事にすること考えないの。

ユウタ　　ミイ、お前そんな理想主義言ってるから乗り遅れるんだ。

ミサキ　　理想？そうかな。おじさん、私の言ってること変？

寺田　　いや、むしろ頼もしいくらいだ。だからこそ小福のメジャーデビューが必要なんじゃないかな。

ユウタさらにギョーザを口に放り込む。

ユウタ　　お父さん、オレ店やるよ。新幹線はオレにとってもチャンスだ。

ミサキ　　ああ、みんなちっともわかってない。

鉄郎　　お前さえやる気になつてくれればお父さんもがんばるつもりだ。

ミサキ　　もう、新幹線とカドヤは関係ないんだから。

ユウタ　　いや、新幹線が来るからこそ勢いを借りるんだ。

ミサキ　　違うって。何がかがやきよ。脂ぎってギラギラが見え透いてるじゃない。

ユウタ　　ミイは今は受験のことだけ考えてる。

ミサキ　　ああ、もう、全然わかってない。ねえ、お父さん。

ミサキ鉄郎の腕を揺さぶる。

鉄郎　　ま、二人とも、腹へってるから気が立つんだよ。さ、ご飯にしよう、ご飯に。あとからあとから。

鉄郎店のカーテンを閉めにかかる。

ユウタギョーザの包みのぞきこむ。

ユウタ あ、ギョーザあと3個しかないぞ。

ミサキ ああ、お兄ちゃん食べ過ぎ。あーあ、やっぱハンバーグ作らんならん。

ミサキ店の奥に行きながら。

ミサキ お兄ちゃん、手伝ってよう。

ユウタ おう、わかった。わかった。

あとに続いてユウタも行く。寺田残りの小福を包み立ち上がる。

寺田 じゃ、オレ、今日のところはこれで帰る。また来るわ。

鉄郎 おう。ありがとう。

寺田 ちよつとあと、大変そうやな。

鉄郎 まあな。

寺田 ミサキちゃん、しっかりしてきたな。

鉄郎 母親のいない分な・・・淋しいの我慢させとる。

寺田 ユウタも頼もしいじゃないか。

鉄郎 商店街はあと継ぐ者がおらんでみな困つとる。

寺田 デザートの件、よろしく頼むな。

鉄郎 ああ、早いほうがいいんだろう。あした中に返事するわ。

寺田店の戸を開ける。

寺田 うーっ、寒。今晚もしかしてまた雪かぁ・・・。

おわり